『論叢』玉川大学教育学部紀要　第17号　2017，pp. 187～200

［実践報告］

教科「音楽」におけるアプローチについての考察
――ピアノ実技レッスンの事例を基に――

久保紘子

要　約

小学校教諭，幼稚園教諭を目指す学生の「音楽」において，ピアノの実技レッスンを行っている。アンケートやレッスン記録などをもとに，学生の実態を調査した。調査結果から習得曲数の差が出る要因について分析を行った。楽譜の基礎知識とリズム感が習得スピードの差と関連することが示唆された。また，音楽に対する意識が，学生の取り組みに関係していることも分かった。それらを踏まえて，今後の授業アプローチについて考察した。

キーワード：ピアノ技術習得差，演奏することへの自信，読譜，リズム感，両手の運動

はじめに

小学校教諭，幼稚園教諭の各免許の取得を目指す学生の教科「音楽」の授業で，楽典と並行してピアノの実技レッスンを行っている。ピアノを学習することにより，音楽の基礎知識が身につくのはもちろんであるが，なにより学生が将来子どもたちと音楽を共有する際，ピアノは必要不可欠なものになるからである。当然，各採用試験にもピアノ実技がある場合もあり，そのためにもピアノ実技の指導は重要だと考えている。

授業では楽典や歌唱も行い，なおかつ20～40名の学生に教師1人なので一人一人に割ける時間は非常に短い。音楽における実技の習得には1対1のレッスンが理想ではあるが，大人数のグループレッスンならでは利点も生かしながら，一人一人のピアノの技術向上を目指して授業を行っている。

しかしながら，学生のピアノ経験の有無，習熟度の違い，音楽に対するモチベーションの差など課題は多い。今回は，自身の教科「音楽」の実践報告を基に，学生がより積極的にピアノに取り組むためのアプローチについて考察する。

所属：教育学部教育学科　受理日　2017年10月30日

1　子ども[1)]と歌うためのピアノ技術

集団で歌を歌う時，歌いだしの合図や旋律の音程，テンポなどをリードすることが必要になる。そのようなリードをするのに適している楽器の一つがピアノである。ピアノの特性はクリアな音程が取れると同時にリズムやハーモニーを奏することである。また，音の強弱や様々なアーティキュレーションがつけやすく，楽曲のもつイメージを一人で表現することができる。子どもと一緒に歌を歌うのにピアノは最適な楽器といえる。

ピアニストの市田儀一郎は著書『ピアノ伴奏の基本と奏法』で学校音楽の指導について,「テンポの遅れや粘り，音程の是正，パートの入り方，あるいは発想についての鼓舞などをピアノの音で指示し，牽引するのは必要でしょう。適宜な和声やリズム，動きなどを添えて弾奏するのはむしろ不可欠ではないでしょうか。[2)]」と述べているように，教育現場の音楽活動においてピアノは必要不可欠なものである。

教科「音楽」の授業では,「子どもと歌うためのピアノ」の習得を目指している。ソロピアノではなく，歌の伴奏としてのピアノ技術を学ぶ。それは芸術歌曲のピアノ伴奏とも違い，子どもが楽しく歌えるピアノ伴奏でなければならない。授業では，主に以下の5点に重きを置いてピアノ技術の向上を目指している。

1. テンポに乗り，止まらないこと。

ピアノ伴奏での勝手なテンポの揺れや，伴奏の中断は歌いにくさに直結する。市田は「テンポとは流れであろう。運動性の基盤となる重要なポイントです。伴奏者は安定したテンポを曲の開始から直ぐ様披歴し,いわゆる“テンポに乗る”ことが大切です。[3)]」と述べている。また，子どもたちが楽しく歌っている時に，曲を止めるのは避けなければならない。ミスタッチをしても，止まらず弾き続けるのも必要な技術の一つである。

2. 歌う旋律がクリアであること。

まだ音程感覚が不安定な子どもと歌う場合はクリアな音程とリズムで旋律をリードする必要がある。

3. 歌いだしの合図が明確であること。

園児のほとんどは楽譜を持って歌わない。小学校教科書にも前奏は記載されていない。ピアノを弾きながら，前奏・間奏からの歌いだしの合図を出すことは必要な技術である。

4. ブレスのタイミングがあること。

ピアノソロとピアノ伴奏の大きく違うところは歌詞とフレーズにあったブレスを取ることである。ピアノだと一息で弾けても，歌だと歌えない，というのはよくあることである。市田も「歌手というものは自分自身が楽器です。(中略)言葉と関連した発声という重大事があります。息つぎ，呼吸，歌詞の発音，音程のとり方，体の処理法など，ピアノに携わる人とはまったくちがった種々の条件なり，制約があるわけです。[4)]」と述べているようにピアノと歌は発音の方法もタイミングも異なる，歌のためのピアノは，歌詞をよく読み，フレーズとブレスのタイ

ミングを工夫する必要がある。

5. 曲想の雰囲気が伝わること。

子どもにはアーティキュレーションの違いを言葉で指示するより，ピアノで表現したほうが伝わりやすい。そのためには曲想にあった表現の工夫をすることが必要である。前奏で曲の雰囲気を作り出すことも大切である。市田は「音楽のより良い指導にはより豊かな能力が必要なのです。現場の教師というものは批評家であったり，音楽学者であったりするよりも，まずより音楽家であって欲しいと願うわけです。[5)]」と述べているように，より豊かに音楽表現することが，子どもの歌をより素晴らしいものにするのである。

初心者は上記の1と2を習得できるようにする。旋律と伴奏が弾けるようなったら3以降に気を付けて練習するよう指導している。しかし，4，5に関しては旋律を練習する中で習得していく学生が多い。ピアニストの井上直幸は「良い演奏というのは，「指」（テクニック）が先行しているわけではなくて，「イメージ」が先行しているものだと思います。つまり「こういうふうに弾きたい」という意志―その曲に対する，曲全体の大きなプランから，瞬間瞬間の（今，弾こうとしている）部分までの構想―が，まず先にある。[6)]」と述べている。実際に学生も，曲に対するイメージを持つことでピアノの習得がスムーズになっている。

2　受講学生の音楽歴と授業の進め方

1. 受講学生の音楽歴

「音楽」の初回授業で学生のこれまでの音楽歴についてアンケートをとっている。対象は2015～2017年の「音楽」の受講生170名である。音楽歴について以下の5点を質問用紙に記入する方式で聞いている。

1，音楽が好きか　5段階で評価

2，歌唱が得意か　5段階で評価

3，楽典は得意か　5段階で評価（右図参照）

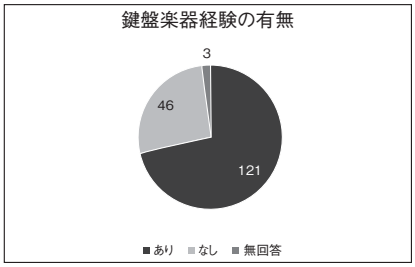
気持ち	好き　そうでもない 5　4　3　2　1	コメント
歌唱	得意　苦手 5　4　3　2　1	コメント
楽典 （楽譜の勉強）	得意　苦手 5　4　3　2　1	コメント

4，鍵盤楽器の経験の有無と経験年数

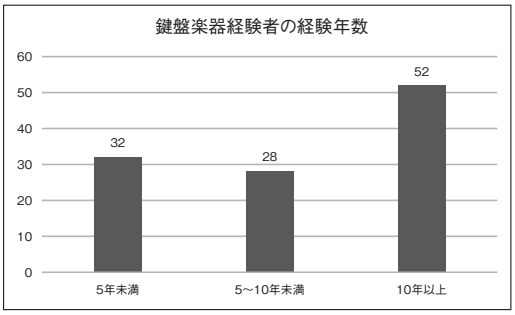
5，鍵盤楽器以外で得意な楽器

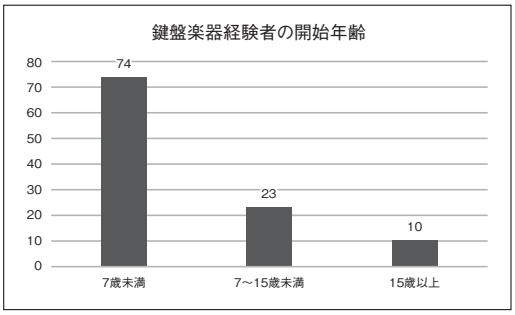
1～3については自己評価である。「音楽」の初回授業で記名のアンケートなので大半の学生が4か5の好きに丸をしている。実際の授業でも音楽が好きな学生が多いと感じている。歌唱は得意，不得意で聞かれると「5. 得意」とする者は多くなく，「下手だけど好きです」というようなコメントが目立つ。楽典に関しては「5. 得意」とする者は少数である。実際には中学校「音楽」程度の楽典が理解できていない学生もいて，楽譜の読み方については授業で一から取り組むようにしている。

「4，鍵盤楽器の経験の有無」については，ピアノ・電子オルガン・オルガンを対象とした。鍵盤ハーモニカは両手演奏の鍵盤楽器ではないのでアンケートの対象から外している。オルガン経験者はいなかったので，以降ピアノ・電子オルガン経験者を鍵盤楽器経験者とする。習っていた年齢と年数も聞いている。約25％の学生が両手で鍵盤楽器を演奏するのが初めてである。



下のグラフは鍵盤楽器経験者の開始年齢と経験年数である。ほとんどの経験者は15歳未満までに鍵盤楽器に触れている。グラフの15歳以上から始めた10名のうち9名は，18歳を過ぎてからピアノ教室に通い始めた学生である。





「5鍵盤楽器以外で得意な楽器」を記入したのは42名，全体の約25％であった。管楽器が最も多く31名，続いてギターが7名，そのほかドラム，ハンドベル，アコーディオン，マンドリンなどがあった。

2. 授業の進め方

「歌唱用の簡単なコード付き2段譜（右手：旋律，左手：伴奏　ともに単旋律）を5曲弾けるようにする」という目標を掲げ授業を行っている。教育学科は小学校共通教材の中から5曲，乳幼児発達学科は『あさのうた（本多鉄麿作曲）』『おべんとう（一宮道子作曲）』『おかえりのうた（一宮道子作曲）』の3曲[7]と任意の2曲[8]の計5曲の習得を目指す。

グループレッスン形式をとり，2週間に1回，グループの前で演奏し教師のアドヴァイスを得る。人数が多いためクラスを半分にし，レッスンと演習を交互に行っている[9]。1人あたり3～5分の個人レッスン時間をとっている。個人レッスンはグループ内で行うので，レッスンは常に20名前後が聴いている状態である。人前で弾くことに慣れるためにもグループレッスンは効果的である。久保田葉子は小学校教諭を目指す学生のピアノグループレッスンの魅力を「日頃から聴衆の居る環境に置かれていれば，授業時間内にメンタル・トレーニングができるかもし

れない。また，聴いてくれる人がいる環境でこそ伸ばせる表現力がある[10)]」「仲間が聴いていることで，音楽とそれを受容する際に起こる様々な感情を共有し，後からでも学生同士で交流や意見交換することができる[11)]」と述べている。学生が目指すのは「子どもと一緒に歌うピアノ」である。人前で弾くこと，みんなと歌いながら弾くことに慣れるのは必要なことである。また，実際に筆者の授業でも久保田が述べているようなクラス内での助け合いが頻繁に行われている。孤独になりがちなピアノ練習だが，仲間と一緒に練習することで，課題を乗り越える学生も多くみられる。

最終授業でクラス全員の前で当日指定された2曲を発表する。

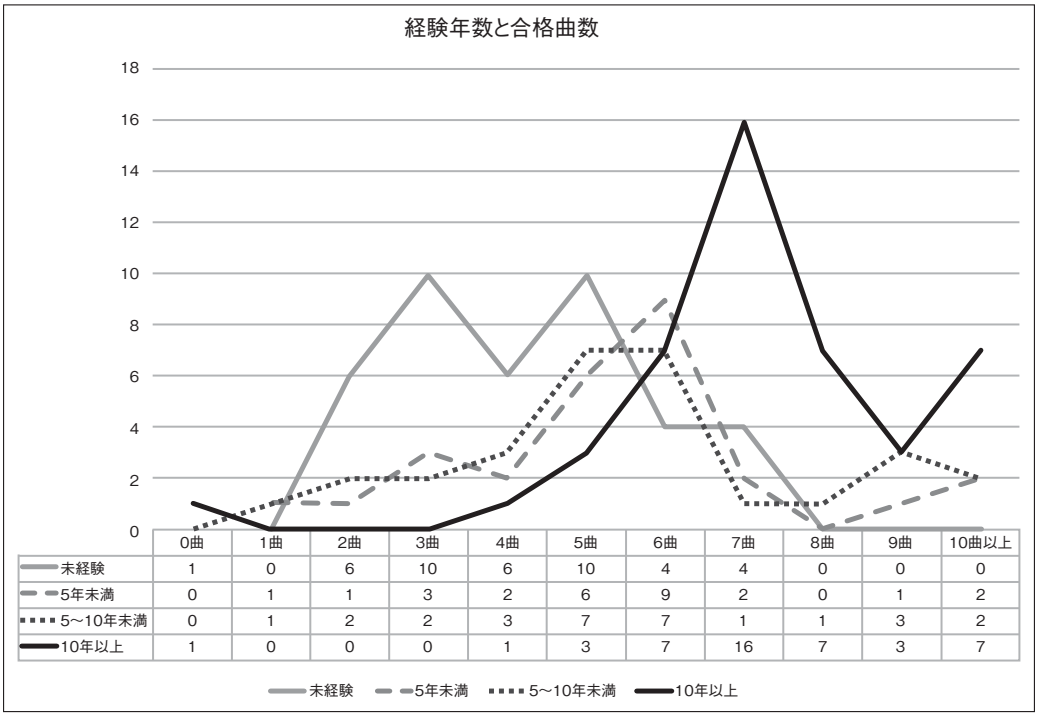
初心者には，初回の授業で鍵盤の位置の確認や，弾きやすい手の形などをレクチャーしている。2017年夏期スクーリングでは，初回授業で経験者と未経験者を分け，未経験者のみに鍵盤の位置の確認や，手の形，指番号決めなどを行った。この方法は，その後の未経験の個人練習をスムーズにした効果があった。

評価は最終授業でのピアノ発表のほか，レッスン内で合格をもらった曲数，小テスト，楽典課題，授業態度など総合的に判断している。

3. 学生のピアノ曲習得状況

学生は合計6回の個人レッスンを受けることになる。レッスンで合格をもらった曲が5曲になるよう練習をする。5曲合格した後は，自分の弾きたい曲を練習し弾ければ合格となる。また，ピアノで合格をもらった曲を弾き歌いした場合，新たな1曲として合格としている。（5曲クリアしている場合のみ）

グラフは授業内での合格曲数と鍵盤楽器経験年数の相関である。（夏期スクーリング，経験年数不明の学生は除いている。[12)]）レッスンは1人6回なので，7曲以上合格している学生は，1回のレッスンで2曲以上，ないしは授業内で合唱の伴奏などをしたことになる。



	0曲	1曲	2曲	3曲	4曲	5曲	6曲	7曲	8曲	9曲	10曲以上
未経験	1	0	6	10	6	10	4	4	0	0	0
5年未満	0	1	1	3	2	6	9	2	0	1	2
5～10年未満	0	1	2	2	3	7	7	1	1	3	2
10年以上	1	0	0	0	1	3	7	16	7	3	7

10年以上経験者にとって5曲の習得は難しいものではないことがわかった。10年以上経験者で合格が5曲に満たなかった2名は，欠席が多い者と経験はあっても読譜が極端に苦手な者と特例であったと考える。5年以上10年未満の経験者は過去に習っていたという学生も多い。そのためブランクがあり，10年以上の経験者より習得のスピードはやや落ちる。しかし，5曲以上習得できる学生が多く，10曲以上習得した学生も2名いた。5年以上10年未満の経験者で5曲習得できなかった学生は，欠席が多い者，弾けると思って練習を怠る者などで，本人の授業への積極度によるところが大きかったと考える。5年未満の経験者は幼少期の数年やピアノを始めて数か月の学生が多い。未経験者に近い学生も含まれる。18歳を過ぎてピアノを始めている学生はモチベーションが高く，よく練習する。このグループで7曲以上の合格した5名は全員9歳以上からピアノを始めていた。自らピアノを始めたからか，読譜の能力が高かった。

経験者の多くにとって，5曲の習得は難しいものではない。実際のレッスンでもブレスを感じることやアーティキュレーションの工夫，弾き歌いの練習など，「子どもと歌うピアノ」の実践的なレッスンができている。

未経験者のグラフの山は3～5曲にある。未経験者は，初め数回のレッスンで手の形や指番号の直し，片手ずつの練習などを行うのでレッスンの回数上，3～5曲のクリアが多くなる。一方で未経験でも5曲以上合格した学生は約44％いる。

3　5年未満経験者の事例からみるピアノ習得の差

未経験者の中で違いが出るのはなぜか。5年未満経験者は18歳と体ができてから始めた学生や幼少期以来のため基礎を忘れている学生が多く含まれる。未経験者と5年未満経験者の計68名の事例を基に，習得差について考察する。5年以上経験者の合格曲数の違いは本人の授業に対する積極度の違いによるところが大きいので割愛する。

1. 具体的な事例

合格曲が5曲以上の学生と5曲未満の学生の具体的な事例をあげる。ここにあげる6名は特徴的な例である。A～Cが5曲以上合格者，D～Fが5曲未満合格者である。

Aさん：ピアノ未経験　楽器経験なし　合格曲7曲

ピアノが全くの初心者で，一点ハの鍵盤がどこかもわからないところから始めた。歌は好きで授業でもしっかりと歌うので旋律はすぐに体に入った。また，リズム感がよくテンポがぶれることがなかった。ずっとスポーツをしていたそうで，自分の意思で指をコントロールできたことが上達の早かった理由の一つと考えられる。歌を歌うことができたので，弾き歌いをするとアーティキュレーションの工夫がすぐにできた。

Bさん：ピアノ未経験　楽器経験なし　合格曲5曲

歌うことが大好きで授業内でも積極的に歌っていた。ピアノ経験がないこともあり読譜が苦手であった。旋律が頭にあるが，思い通りに指が動かずミスタッチを繰り返してしまう。自分の奏でたい音楽と実際に出る音の違いに我慢できず弾き直しの癖がついてしまった。いったん自分の音楽を止め，冷静にテンポ通り音を弾くことに集中するように指示すると，最後まで止まらずに弾けるようになった。正しく音を打鍵できるようになれば，フレーズ感も，アーティキュレーションの工夫も容易にできた。

Cさん：ピアノ歴　14歳～17歳　その他楽器経験あり　合格曲9曲

中学時代に音楽系の部活に所属し，ピアノを習っていた。自ら音楽に向かう姿勢が強く，手の形や読譜の基礎ができていた。弾き歌いに苦労しなかった。また，多くの曲を知っていたので，5曲合格後も自ら選曲し，季節にあった曲などを練習していた。どのような音楽を奏でようかというイメージが明確で，どの曲もアーティキュレーションの工夫がなされていた。

Dさん：ピアノ未経験　楽器経験なし　合格曲2曲

人前で歌うことが苦手で小学校中学校とリコーダーが吹けなかった，という苦手意識があった。楽譜を読むことが難しく，指をバラバラに動かすことも難しかった。小学校1年生共通教材『うみ』の右手（旋律）を習得するのに1か月かかった。最初は片手ずつゆっくりと，繰り返し同じ旋律を練習した。4か月で2曲と多くはないが，何度も練習を繰り返すことで指をバラバラに動かす，という第一段階を突破できた。右手の旋律練習に時間をかけたためか，『うみ』

は弾き歌いができるまでになった。

Eさん：ピアノ歴数か月　楽器経験なし　合格曲2曲

音楽は好きだが歌は音痴かも，と自信がなかった。将来の職業像もあって，なんとかしてピアノが弾けるようになりたいと努力していた。しかし，リズム感覚をつかむのに時間がかかり，付点8分音符＋16分音符のリズムの習得に1か月かかった。特に子どもの音楽にはこのリズムが多く使用されているので入念に行ったのだが，自分で正解がわかるまでに時間がかかった。指を自分の意思通りに動かすことが難しく，ゆっくりとした繰り返し練習を重ねることで2曲習得することができた。また，人前で弾くことができなかったが，家族や友人の協力を得て人前で弾く練習を重ね，最後は堂々と弾くことができた。

Fさん：ピアノ未経験　楽器経験なし　合格曲2曲

初回授業のアンケートで「音楽」「歌唱」「楽典」すべてにおいて1を記入した。音楽に対する苦手意識が強く，初めの一歩を踏み出すのに時間がかかった。テンポに乗ることが難しく，旋律を正しくリズム打ちすることから始め，右手と左手のリズムを膝で叩いて覚えるようにした。なかなか旋律とリズムが体に入れることが難しく，右手の旋律を完成させるのに1か月かかった。

2. ピアノ習得に差が出る4つの要因

5曲以上合格者と5曲未満合格者の差は何か。具体的に4つについて考察する。

(1) 演奏することへの自信

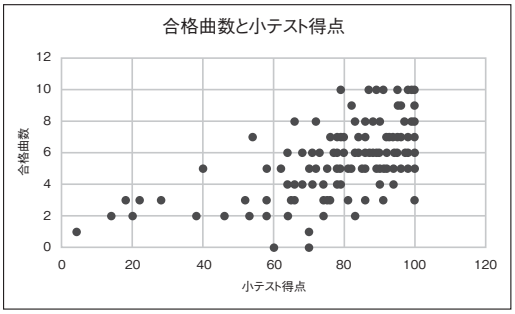
特に大きな違いは「演奏すること」に対する自信である。「演奏すること」に対して何かしらの苦手意識や不安を持っていると，音を出すことに一所懸命になってしまう傾向にある。音が横につながらず曲にならない。しかし，苦手意識や不安を持っている学生も音楽が大嫌いなわけではない。「聴くのは好きだけど，自分で演奏するのは苦手」という学生である。過去にうまくいかなかった経験があり，演奏することを不安に思っていることもある。ピアノの習得に本人の練習・努力は不可欠であるため，苦手意識や不安をいかに克服するかが肝になる。グループレッスンでは，周囲との差を感じ，不安な気持ちを強めてしまう学生もいる。個人レッスンでは学生がクリアできる課題を出し，小さな「できた！」を積み重ね，「できる」という自信を持たせることが不可欠である。

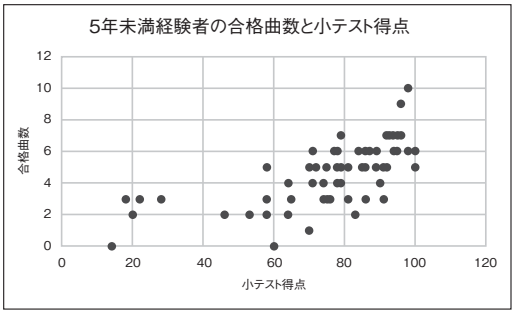
また，未経験でも多くの曲を合格する学生は「イメージ」を持っている。井上が述べているように「こういうふうに弾きたいという意志」が大事であるとわかる。

(2) 読譜

授業では五線譜の説明から音符の長さといった基礎的な楽典から始める。簡単なリズム打ちやリズム聴音も行い，聞こえるリズムと記譜の関係も理解できるようにしている。最終授業前

（14時間目）に楽譜の基礎を問う小テストを行っている。以下は小テスト得点と合格曲数の相関である。教育学科，乳幼児学科，また年次で内容は多少異なるが，基礎知識の問題なので問題に難易度の差はない。平均点は毎回80点台だが，知識問題なので90点以上が多くなっている。

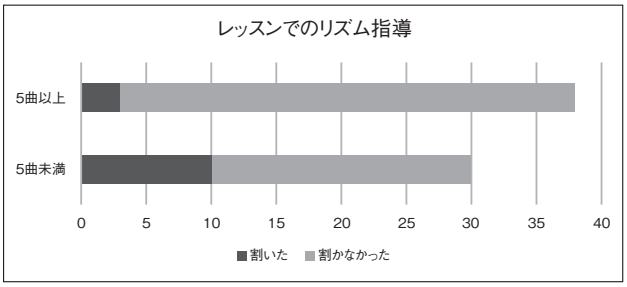




小テストの得点が高いと合格曲数が多いことがわかる。また鍵盤楽器5年未経験者に限定しても14時間目までに楽譜の基礎を理解した学生は合格曲数が多くなっている。楽譜を視覚的に見ることができるようになり，両手の練習も効率的にできるようになるためと考えられる。逆に楽譜の基礎知識を身に着けられないとピアノの習得にも時間がかかる。ピアノの上達に楽譜の理解は不可欠なのだが，楽譜に苦手意識をもっていて取り組むこと自体を拒絶する場合があり対応に苦慮している。

(3) リズム感・テンポ感

未経験でもリズム感・テンポ感があると合格曲数が多くなる。5年未満経験で7曲以上合格した4名のうち3名はドラム，ダンス，サッカーの経験者で，体を動かし，リズムを体感する活動をしていた。リズム通りに指を動かすことに時間を要さなかったので練習も順調に進んだ。

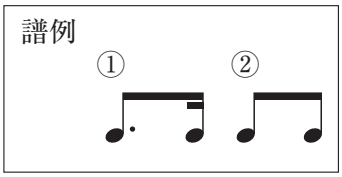


リズムを正確に打つことができないとピアノの習得に時間がかかっている。グラフは5年未満経験者の合格曲数とリズム・テンポにレッスン時間を多く割いた学生の比較である。グラフの濃い部分がレッスンでリズム指導に時間を割いた学生である。合格曲が5曲未満の学生の3割がリズムに苦戦した。歌唱やリズム打ちなどクラス全体で行う時は目立たないが，レッスンで一人になるとリズムが正しく刻めない。またテンポ感がなく3拍子の曲でも伸ばしている間に4拍子になったり，8分音符を4分音符で弾いたりするが，多くの場合指摘されるまでリズムの間違えに気付かない。よって自主練習ではその間違えに気付けないので，

曲の習得に時間がかかってしまう。

リズムの習得が困難な学生は2タイプいる。「耳でわかっているけれど弾けないタイプ」と「耳でわからないタイプ」である。前者は指の問題なので指摘すればその場で直ることも多く，自主練習で直してくることができる。後者は，自分で聞き分けることができないので，習得に時間がかかる。自主練習の際にクラスメイトや家族の協力を得たり，CDなどの音源と一緒に練習するよう指導している。この方法は一定の効果があるように感じている。

特に習得に時間がかかるのは付点8分音符＋16分音符のリズム（譜例①）である。譜例②のように弾いてしまう。①のリズムは，「スキップのリズム」と呼ばれ，子どもの歌に多いリズムなので，できるだけ正確に習得させたい。「スキップのリズム」は小学校共通教材24曲中5曲[13]の旋律に使用されている。また，乳幼児発達学科の課題曲である『あさのうた』『おべんとう』『おかえりのうた』のいずれにも使用されている。まずは，①と②は違うリズムであることを頭で理解させ，耳で聞き分けられるようにする。その後ピアノを弾くと正しくリズムを刻めるようになる。井上が「ピアノを弾く練習というのは（中略）自分の出した音を聴く，という作業なのです。[14]」と述べているように，自分の出したリズムが正しいか正しくないかの判断する耳をしっかりと身につけさせなくてはならない。

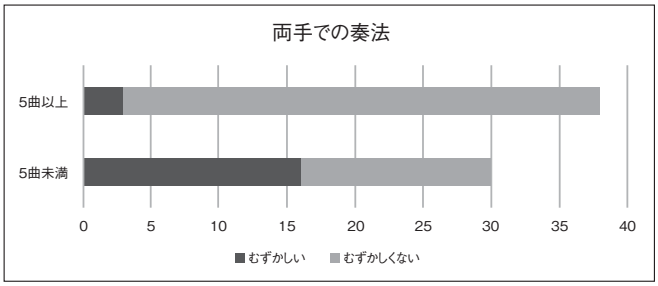


またテンポ感がないと，自分の弾けるタイミングで音を出すため，テンポが一定でなくなる。歌いながら弾くと改善されることもあるが，自分で歌うとテンポの揺れに気付きにくい。グループレッスンで他の学生が歌ってテンポの揺れに気づくことがある。練習の段階から他者に歌ってもらいながら弾くことが必要である。

ピアノは作音の必要がない楽器である。鍵盤をたたけば音がでる。しかし，テンポやリズムは奏者が正しく作り出すしかない。リズムを正しく刻むことさえできれば，作音の必要のないピアノ演奏のハードルはかなり下がることになる。リズム教育の重要性を強く感じている。

(4) 両手の運動

読譜ができリズム感もあって片手ずつ弾くことができても，両手で合わせることが難しい学生もいる。右のグラフは5年未満経験者で両手を合わせるところで時間を割いた学生である。



ピアニストのマリナ・フェレイラは「動作と筋肉の経験は楽器演奏ではなく日常生活で身につくもの。生活動作が演奏動作の土台となっているのです。したがって，運動経験が多種で多

様な人ほど，演奏動作を楽に身につけられる可能性が高いということです。[15]」と述べているように，実際，鍵盤楽器未経験者でもスポーツ経験者は早い段階で両手を合わせることができている。

リズムだけでも両手で合わせることが難しいと必然的に合格曲数が少なくなってしまう。鍵盤楽器未経験者にとって，両手10本の指を別々に動かす，というのは今まで経験したことのない動作である場合が多い。マリナ・フェレイラは「新しい動きを学び，ものにしようと思うなら，最初は筋肉の活動よりも知的な活動を優先すべきです。[16]」と述べている。授業でもただやみくもに両手を合わせることをしないよう指導している。右手（旋律）を歌いながら左手の練習をしたり，両手でリズム打ちをするなどの方法をとっている。その時，どこの音で手が一緒になるのか，音はどれくらい離れているのかなど，楽譜を見て視覚的にとらえさせる。楽譜を見ることで頭が整理され，克服できることも多い。

4　4つの要因を克服するために授業におけるアプローチ

「演奏することへの自信」「読譜」「テンポ感・リズム感」「両手の運動」は密接に絡み合っている。リズムや両手で演奏することに戸惑っても，楽譜を見ることで視覚的に頭が整理され克服する学生も多くいた。しかし「楽譜は難しい」と思い込み，楽譜の基礎知識を入れようせず，感だけで乗り切ろうとする学生もいる。前述の通り，楽譜の基礎知識がなく多くの曲を弾くことは難しい。それだけでなく，教育学科の学生は将来「音楽」の授業をするにあたり楽譜の基礎知識は当然必要である。乳幼児発達学科の学生はこれから多くの曲を弾かなければならない。応用力を付けるためにも楽譜の基礎知識の学習は必須である。

現在授業では，前半にリズムと楽譜が結びつくよう，後半ではさらに踏み込んだ楽典について授業を行っている。12時間目以降はそのクラスの特性に合わせて，作曲やボディーパーカッションを行っている。前半はリズム打ちに重点を置き，感覚的にとらえたリズムがどのような記譜になるかを理解する。リズム譜を見てリズム打ちができることが目標である。「4分音符＝タン」など音符に言葉を付けて主要なリズム型を覚えるようにしている。リズムの記譜の理解を深めるためにリズム聴音を行っている。リズム聴音は4分の4拍子，2小節で単純なリズムを使用し，初心者でも書き込める範囲を考慮している。当初，リズム聴音は楽譜嫌いを加速させるかと懸念したが，耳で聞いたリズムが自分で書ける，ということは楽譜が苦手な学生にとって驚きのようであった。自分で楽譜が書けたことに喜びを感じる学生もいた。リズム聴音は楽譜を身近に感じるのに一役かっている。

現在，授業ではリズム聴音を1～2回ほどしか行えていない。ピアノの習得にリズム感が大きく関係していることを考えると，今後，リズム打ち・リズム聴音の活動を増やす必要がある。

また，教育学科ではボディパーカッションの楽曲をグループで演奏している。ボディパーカッションは音程を気にする必要がなく，全身を使って表現できるので，学生はのびのびと参加し

ている。また，身振りをまねするだけで様々なリズムを習得することができる。多くの学生が演奏を楽しむことができている。

今後は，リズム聴音やボディパーカッションなどの活動を増やしながら，演奏することの楽しさを体感させ，演奏することへの自信を取り戻せるようなアプローチを行っていきたい。

おわりに

今回，本稿を書くにあたり170名のアンケートとレッスン記録を読み返した。経験者，未経験者に差があることは感じていたが，5年以上経験者にとって5曲のクリアが難しいものではないとわかった。今後，5年以上経験者にはより専門的な指導をしていきたい。経験年数が短くてもピアノを始めた年齢が高いと読譜力もあり上達が早いこともわかった。マリナ・フェレイラの言う「新しい動きをものにするには筋肉の活動よりも知的な活動を優先すべき」から考えれば，自主的に頭を使ってピアノを弾いてきた学生の方が弾けるというのは納得の結果である。

また，漠然と感じていた「読譜」「リズム感」「両手の運動」について考察することで，リズム教育の必要性を確信することができた。現在行っているリズム打ち・リズム聴音を強化し，さらなる学生の上達を目指したい。

楽器の習得においてなによりも必要なのは本人のやる気であり，努力である。授業時間外の本人の努力が非常に大きい。しかし，子どものころピアノのレッスンで怒られたり，音楽の授業がうまくいかなかったりと演奏することに対して苦手意識を持っている学生もいる。そういった学生にとって，ピアノに向かう行為そのものが大変なことであろうと推察する。鍵盤を見て一点ハの位置がわからず固まる学生もいる。先を急がず，まずは自信を取り戻すところから，と改めて考えさせられた。学生が演奏することが楽しいと思えるようなアプローチが必要である。苦手意識を持っていた学生の中にも，1曲弾けたことで自信を持ち，ピアノの練習に励むようになった学生もいる。また，発表後に「弾けたよ！　他の曲も練習する！」と晴れ晴れとした表情で教室を後にした学生もいた。

ある幼稚園の副園長先生に「実習生がピアノが弾けなく困っている」と言われたことがある。実習生のピアノ練習に園が付き合っている，と。今後，彼らは自らピアノに向かって練習ができるようにならなくてはいけない。そのためにも基礎知識を固め，何より音楽に積極的に関わる人を育てることが教科「音楽」の役目であると考える。音楽が苦行にならないよう，今後も授業展開やレッスン方法について研究，考察していきたい。

最後に，7割以上の学生が約4ヶ月の間に5曲以上の楽曲を習得している。学生たちの努力に敬意を表するとともに，このような考察をする機会を与えてくれたことに感謝する。

注

1）本稿において「子ども」は未就園児～小学校低学年児童を指すこととする。
2）市田儀一郎『音楽教育選書③　ピアノ伴奏の基本と奏法』1976，明治図書出版，p. 146
3）市田儀一郎『音楽教育選書③　ピアノ伴奏の基本と奏法』1976，明治図書出版，p. 13
4）市田儀一郎『音楽教育選書③　ピアノ伴奏の基本と奏法』1976，明治図書出版，p. 145
5）市田儀一郎『音楽教育選書③　ピアノ伴奏の基本と奏法』1976，明治図書出版，p. 147
6）井上直幸『ピアノ奏法―音楽を表現する喜び』1998，春秋社，p. 14
7）梅沢一彦編『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』2015年，kmpの楽譜を使用。
8）教科書指定している『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』（梅沢一彦編）より選曲。または子どもが歌う曲。
9）2015年教育学科は受講生が少なかったため，毎週レッスンを行った。2017年夏期スクーリングは1曲弾けることを目標に毎日レッスンを行った。
10）久保田葉子「小学校教員養成課程における音楽教育―ピアノ実技レッスンの目的と可能性」p. 46
11）久保田葉子「小学校教員養成課程における音楽教育―ピアノ実技レッスンの目的と可能性」p. 52
12）夏期スクーリングは目標曲が1曲なので比較対象から除外する。
13）《かたつむり》《かくれんぼ》《夕やけこやけ》《こいのぼり》《スキーの歌》の5曲。
14）井上直幸『ピアノ奏法―音楽を表現する喜び』1998，春秋社，p. 51
15）マリナ・フェレイラ『ピアニストの筋肉と奏法』2015，音楽之友社，p. 16
16）マリナ・フェレイラ『ピアニストの筋肉と奏法』2015，音楽之友社，p. 17

参考文献・引用文献

市田儀一郎『ピアノ伴奏の基礎と奏法』明治図書出版，1976年
井上直幸『ピアノ奏法―音楽を表現する喜び』春秋社，1998年
梅沢一彦編『誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』kmp，2015年
梅沢一彦編『続・誰でもすぐ弾けるピアノ伴奏』kmp，2017年
マリナ・フェレイラ『ピアニストの筋肉と奏法』音楽之友社，2015年
山田俊之『楽しいボディパーカッション①―リズムで遊ぼう』音楽之友社，2001年
山田俊之『楽しいボディパーカッション②―山ちゃんのリズムスクール』音楽之友社，2002年
梅沢一彦「フロッピーの交換による音楽的スキルアップ」玉川大学教育学部紀要『論叢』，2005年，pp. 23–38
久保田葉子「小学校教員養成課程における音楽教育―ピアノ実技レッスンの目的と可能性」『児童教育実践研究　第5巻第1号』十文字学園女子大学人間生活学部児童教育学科，2012年，pp. 45–52
木下和彦「子どものうたの弾き歌い指導におけるコード伴奏の有用性―幼稚園教員養成校の教員及び学生を対象とした質問調査を通して―」全国大学音楽教育学会『創立30周年記念誌』，2015年，pp. 73–82
杉山祐子「ピアノ初心者のための読譜力評価尺度作成の試み」『全国大学音楽教育学会　研究紀要第24号』，2013年，pp. 1–20
『ソナーレSONARE音楽科教育実践講座第3巻　ひびきあう歌声』ニチブン，1992年，pp. 260–270

A Discussion about Approach in the Subject "Music": Based on Examples of Piano Lessons

Hiroko KUBO

Abstract

Students who want to become elementary school teachers and kindergarten teachers are practicing the piano in the subject "Music." Based on questionnaires and lesson records, I surveyed the students' actual conditions and analyzed the factors that could lead to the differences in learning the piano. It was suggested that the knowledge of the score and the sense of rhythm are related to the differences in learning speed. I also found that the awareness of music has something to do with the students' efforts. After taking these facts into account, I considered the future lesson approach.

Keywords: difference in piano skill acquisition, self-confidence to play, reading scores, sense of rhythm, movement of both hands